

粟島浦村は 「しおかぜ留学制度」に どう取り組んでいるか

粟島浦村教育長 川村三千男さん
元粟島浦村教育長代理 本保 敦子さん

編 集 部

山村漁村の豊かな自然を活用した「留学制度」が注目されています。新潟県内では、羽茂村、妙高市、粟島浦村等で実施されてきています。

その内の一つ、岩船郡粟島浦村では、3年前から「しおかぜ留学制度」として取り組まれています。

そこで、粟島浦村教育委員会をお訪ねして、その取り組みの概要について取材しました。

編集部

問い 1 現在、貴教育委員会が実施している「しおかぜ留学制度」について、どのように取り組まれていますか。留学児童・生徒数や経年の動向について聞かせて下さい。

1年目（2013年度）・・・7名

2年目（2014年度）・・・10名

3年目（2015年度）・・・10名

○粟島浦村立粟島浦小・中学校に在学（全校27人のうち10人が留学生で、移住した子どもも含めると半数以上は島外から）。

○留学生は日本全国各地から、1名は中華人民共和国

から。

○対象学年・・・小学校5年生、中学校3年生。

○留学生は「しおかぜ寮」に入居。今年度からは、1名が、漁師の家でホームステイして留学。

問い2 どのような経過で「しおかぜ留学制度」に取り組むことになったのでしょうか。教育委員会での論議や地域の要望など、その動機についてお聞かせ下さい。

数年前から島の人口が減り、児童生徒が減り、このままでは学校がなくなるのではと心配された。そこで、何とか学校の存続を考えたが、存続を考えたときには島の子どもたちだけでは不可能になると。他から留学生を迎え入れなければということで、留学生を迎え入れようと考えた。学校の存続、島の存続を第一に考えた。

そして留学生を迎え入れることで、島の子どもたちが人間関係を広めて、よりたくさんの子どもたちと切磋琢磨出来る状況にしたいということが2番目だった。

さらに、粟島浦村に留学するメリットとして、島の自然を活用した教育、島独自の少人数教育による学力を着けることが挙げられる。さらに、数年前から実施

していた馬を活用した「命の教育」をそこに加えて、豊かな知識、豊かな心を育てることが出来る環境が、粟島浦村には備わっていることに気付いた。

留学制度を既に実施している自治体の取り組みを調べ、粟島浦村で制度を立ち上げるときの参考にした。たまたま東京で会議が開催されたとき、鹿児島県三島村の教育長さんとお会いした。この村で実施している留学制度は「潮風」とネーミングされていたので、粟島浦村では平仮名で「しおかぜ」として使用することを了解してもらった。

問い3 この「しおかぜ留学制度」をすすめるための目標、組織、予算等についてお聞かせ下さい。複数年の取り組みではその年度毎にお聞かせ下さい。

初年度、制度立ち上げ時には、牧場に関連づけて教育活動を展開しているフリースクールのNPOに運営を委託した。島外からの視点で、粟島の自然、島の暮らしについて見つめ直し、粟島浦村の魅力・教育に結びつくものを見つけ出してもらった。それらが、教育プログラムに位置付けられている。

2年目からは、村が運営に当たるようにした。それは、地域住民との結びつきを強め、留学制度についての島民の理解を高めたいからだ。

留学にかかわるスタッフ会議を、毎月1回実施している。メンバーは、教育長、小・中学校校長、小中学校教頭、本保さんや「しおかぜ寮」管理人となる「しおかぜ留学」専従スタッフ、支援する人たち等。ここでは、問題点を出し合い、その解決方法を考え実行する。児童生徒、保護者、スタッフに対するカウンセリングを、月に1回実施して、ストレスを解消して生活や活動がスムーズに出来るようにしている。カウンセラーは、県から派遣された人や、看護師、養護教諭などが当たっている。

問い4 とりわけ「しおかぜ留学制度」は、学習内容や学びの質と関わって特徴的な点はどのようなことでしょうか。

粟島浦村立粟島浦小・中学校では、少人数を生かした学習を工夫している。少人数の良さを生かして、分かるまでじっくり教えることが可能だ。中学では部活

動があり、小学ではキッズ活動がある。

寮では、午後7時から8時までの時間を、学習時間と位置付け、宿題をしたり、分からないところを教え合ったりしている。

留学生には、近くの牧場に協力してもらって、馬を活用した独自のカリキュラムがある。この牧場で、留学生用に3頭の馬を飼っている。休みの日、朝の餌やりから清掃まで責任を持ってやり遂げる。また、乗馬もする。そのことで、「命の教育」の充実が図られている。

また、地域で実施されている「島開き」など様々な行事や学校行事には、離島、漁村らしい内容が盛り込まれている。それらに参加してもらって、地域の文化に触れ・生産の仕方を体験的に学ぶことが出来る。

問い5 また、この取り組みをすすめるにあたって、留学生が日頃暮らす寮の運営や受け入れ校、地域の方々との協議はどのようにすすめられましたか。

民宿だった家屋を借り上げ、留学生の生活する「しおかぜ寮」として運営している。1年目は、小さな元民宿だった。留学生は7名。部屋数が少なく、風呂は家庭

風呂だったので、村にある温泉風呂にも補助をして入れてもらった。このことが、地域の方々と交流する機会になった。この温泉で知り合った漁師の方を運動会に招待した。すると、その方が運動会を観覧し、大漁旗を振って応援してくれた。2年目からは、現在の大きな元民宿だったところに移り、現在に至っている。

最初の保護者説明会するとき、寮での生活について話した。1階で食事、入浴。2階で就寝。携帯電話は持たせない、必要な場合は寮長さんの許可をもらって寮の電話ですること。保護者からの連絡はEメールでやってもらう。夜10時以降は男女でいたりきたりしないことなど。管理人さんにはとくに厳しくといっていることなど。

今年の寮生は、男子が6人で女子が4人。去年と構成人数が逆になった。だから、ご飯などは、ものすごく食べる。野菜より果物を食べたがる子が多い。でも、島内ではほとんど果物が採れないの



写真1 留学生が生活する しおかぜ寮

が実情だ。

山でにわとりを40羽飼っている方に寮生を連れて行ってもらい、えさやりを体験した。そして、おみやげに卵を1個ずついただいた。それをみんなで食べたこともある。

問6 このような取り組みによって、取り組む以前の子どもたちと比べ、生活や学習への取組方や意欲にどのような変化が生まれましたか。教師・保護者・地域の反応についてもお聞かせ下さい。

朝起きることができなかった、学校に行くことができなかつた子が少なくなつた。ま
行けるようになった。ま
た、友達と関われなかつた子が関われるようになった。さらに、発言できなかった子が少しずつ発言できるようになった。等々、問題を解決して学校生活を過ごしている。また、



写真2 マラソン大会を応援する 地域の方々

少人数の学校なので、行事の折には一人一役で、一人一人が輝いている。また、自然の治癒力によって変化が生まれてきている。

一方、島の子どもたちも影響を受けている。島の子は人数が少なく、一学年一人の学級で学んでいた子どもたちが、留学生を受け入れたことで、ちよつと人数が多くなる。すると、いろんな意見交換ができる。島の子の保護者の中には、「今まで一人だとなんにも勉強しなかったのに、今度は負けまいと思つて必死に勉強している。びっくりしたわ」と語っている人もいる。

島内に子どもが増えたことで、登下校や学校行事等を通して、子どもたちと地域住民との交流が生まれ、村の方々も元気になつている。

問い7 今後この取り組みを続けるにあたって残された課題をお聞かせ下さい。

今年、1名の留学生が漁師の家に移り住んで、そこで暮らしました。このような里親制度にも、よりたくさんの子どもたちを受け入れてもらうことを目指したい。

また、親といつしよに島に来てもらつて、空き家を活用して住んでもらうこともある。そういう形で発展拡充したい。

粟島には高校がなく、中学を卒業すると島外の高校に進学することになる。村上には島外に進学する生徒のために村上市内に寮がある。大学進学となれば、全国各地で生活することになるだろう。島の子どもたち、留学経験の子どもたちが、粟島に戻つて来て暮らしてくれたらとも期待する。「Iターン・Uターン」に繋がつてくれれば。そのためには、生業を確保するなど多くの課題がある。

今、寮として使っている元民宿の家屋は、あと何年使えるか分からない。寮が必要なら、寮を建てなければならぬ。そのためには村の方々から「しおかぜ留学制度は、必要だ、大事だ。」との思いを持つてもらわなければならない。そのために「しおかぜ留学制度」について、島民の皆さんに丁寧に説明して行きたい。

〔資料 粟島浦村「しおかぜ留学制度」ホームページ
ドレス〕

<http://www.aushima-shikaze.orc/home.html>

〔取材 伊藤英世、小東由男・所員〕